だったら二人で・・・

缶詰ヒナ鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
だったら二人で・・・

【Ｎコード】
Ｎ０９９８Ｍ

【作者名】
缶詰ヒナ鳥

【あらすじ】
世界は闇で覆われていた。
そんな世界を、神が光で照らし、そこに人々は住んでいた。
しかし、神は全能ではなかった。
ゆえに光は偏り、その光の偏りに不満を抱く者が増えてしまった。
神を殺せ！
そして不満は爆発し、神は墜とされた。
読者の皆様の意見や感想で物語が左右されるかもしれない物語。始

まります！

＊現在執筆凍結中＊

第一話　出会い（前書き）

なるべく読みやすいように書いているつもりですが、読みにくい所などありましたらご指摘、ご指導のほどよろしくお願いします。
また、本作品には書き溜めがありません。
更新は不定期です。
ですが、皆さんの感想、ご意見で進行スピードが変わります。
また、この先はあまり考えてないので、多少ですが「皆さんのご意見で物語が左右される」ことがあります。
＊結末は変わりません＊たぶん・・・

読者の皆様の思い通りになるかもしれない物語。始まります！

第一話　出会い

神を殺せ。
この言葉をきっかけに始まった、神との戦争の末・・・神は墜とされた。

「はぁ……はぁ……！」
朝靄の立ち込める森の中で、一人追われる者があった。
味方はおらず、敵は多数。とても逃げ切れるとは思えない。
しかし、走る足は止まらない。こんなところで、こんなことで力尽きるわけにはいかないのだ。
振りかえり、魔法を放つ。振りぬいた腕から放たれた光は、後方の木にあたり炸裂する。でたらめに放つそれは敵を減らすには至らない。
だが、確実に敵の警戒を強め進行を遅らせる。

（……まだやれる！）

そう言い聞かせ、体に鞭を打ち、走る。が、それも限界か。
酸欠で意識は朦朧とし、威嚇の魔法も上手く撃てずに数が減り移動速度は落ちる。
と、目の前から炎の球が飛んできた。

「なっ！？」

寸前でかわしたものの足が縺れ、ついに倒れ伏してしまう。

（いつの間に前に……！？）

少なくとも数人の気配を前から感じた。急いでそばの木に寄り、立ち上がる。飛び出すのは危険と判断し、木に背を預け呼吸を整える。

「諦めろ！　貴様は完全に包囲された！　大人しく出てこい！」

出れば殺されると分かっていて、誰が大人しく出ていくものか。

「見くびらないで！　私はまだ、本気なんて出してない！」

強気な発言に、敵はあざ笑うかのように応える。

「何を……すでにフラフラではないか！　いくら貴様でも、この人数を相手に逃げ切ることなどできまい！」

そんなことは、やってみないと分からない。

「なら、見せてあげるわ。神をも墜としたこの私に逆らったこと、後悔しなさい！」

そして、辺りは光に包まれた……。

村から森を挟むようにして、少し離れたところに家がポツンとあった。家は建てられたばかりのようで、大きくもなく小さくもないロッジのような造りだ。

家から見て右手に綺麗な湖があり、左手に森がある。湖の前には洗濯物が干してあり、森が拓けたとこには家庭菜園のようなものま

である。人里離れたところで、自然豊かな暮らしを静かに営んでいる様子が窺える。
そんな小鳥がさえずる清々しい空気に水をさすように、その家の扉が勢いよく開いた。

「それじゃあ行ってきまーっす！」

そう言って元気よく家から飛び出したのは、１４歳くらいの少年だった。

「ハル！　遅くならない内に帰るのよ！　後これ、忘れものっ！」

言いながら投げられた一振りの刀を、少年はハシッと掴む。

「っと、サンキュー！！」

見送りに出た母親に後ろ手に手を振り、少年は森へと駆け込んで行った。そしてしばらく迷いなく進むと、大きな白い実のなる小さな木に辿り着いた。

「やった！　まだあった！」

少年は笑顔で、白く大きなそれをそっと手に取る。
このククルの実というのは熟すると白くなるのだが、そうなるまえに大抵は他の動物が食べてしまうことで有名だ。その珍しい実の、しかもこんなに大きな実を手に入れたのだから、少年の嬉しさは表現しがたいものだった。

「これ見たら、母さんも父さんもビックリするぞ！」

少年は背負ってきた篭に実を丁寧に入れた。
そして今度は周りの香草や木の実、キノコなどを手際よく見つけては篭へと詰め込んでいく……。

「よし、こんなものかな……？」

食料をいっぱいに積んだ篭を見て、少年は満足そうにほほ笑んだ。

「よっと！」

器用にそれを背負うと、少年は家へと向かう。
昔はこれだけの作業で夕方までかかっていたのが、いまではまだ日の高いうちに終わってしまうようになっていた。早く帰って今日の収穫を見せたいと思う一方、楽しみをとっておきたいという思いに駆られ、少年は少し遠回りをしていくことにした。

「そう言えば、今朝ものすごい光が……もう少し村の方かな？」

珍しく早起きして朝の訓練をしていると、森で光があふれたのを思い出した。
そして、少年の足は自然とそちらへ向かっていった。少し周りを見て回ったが、何も見つからなかった。

「ん～……この辺りだと思ったんだけどなぁ。」

と、木々の向こうに、何かが倒れているのを見つけた。

「人だっ！」

少年は倒れていた者に駆け寄ると、そばに座りこんで声をかける。

「だ、大丈夫ですか！？」

見ると、倒れているのは少年と同じ年くらいの少女だった。

「う、うぅん……。」

どうやら、生きてはいるらしい。

少年は背負っていた篭を漁ると、いくつかの薬草を取り出した。すり鉢があればいいが、こんなところにあるはずもない。少年はとてつもなく苦いそれを、口に含むとモゴモゴと噛む。ある程度柔らかくなったそれを取り出し、少し迷ってから少女の口に突っ込んだ。

「ぅん！？　ごっ！　ガハッ！」

少女は飛び起きた。

少年が噛んでいた薬草は少量でもある程度回復する珍しい薬草で、そのとてつもない苦みから気付けにも使われるものだった。

「大丈夫？　どこか痛いとこはないですか？」

すぐ近くから声をかけられたことに驚いたのか、少女は飛び退くと鋭い視線を少年に飛ばす。

自分と同い年くらいの女の子から、そんな目を向けられるとは思ってもみなかった少年は、しばし絶句する。

「あなたはだれ？」

「えっと……ハル。」

そんな状況ではあったが、少年は少々特別な環境で育てられた、

そのため徐々に落ち着きを取り戻す。とは言っても、少女の方がより特別なのだが……。

「とりあえず、僕のウチに行こう。君の手当てもしなくちゃいけないしね。」

そう言って、元気そうではあるが、全身傷だらけの少女に背を向けて、篭を背負う。

「ちょっと、まだ行くなんて・・・って聞きなさいよ!」

少年は無視して歩きだした。

「ただいまー。」

篭をおろしながら玄関先で声を上げると、直ぐに母親が出てきた。

「あら、早かったわね。」

そう言って、微笑んだ母親はすぐに顔を強張らせた。

「あ、えっと、森で倒れてたから連れて来たんだ。怪我もしてるみたいだし、手当てを……。」

少年が言い終わるより早く、母親は少年の後ろに隠れるようにしていた少女の手を引いて、奥へと行ってしまった。

「……。」

とりあえず、少女は母親に任せることにして、少年は外に出て畑に水をやり、洗濯物を取り込んだ。
一通りの仕事を終えて、家に戻り、居間へと入る。
そこには手当てを終えて、ボーっとしている少女がいた。母親は夕食の支度をしているようだ。
少年は声をかけようかと思ったが、かける言葉が見つからず、そのまま母親のもとへ向かった。

「何か手伝うことはある？」

後ろから声をかけると、母親はいつものように微笑んで「それじゃあ、野菜を切っておいて。」と言った。しばらく会話もないまま、野菜を切っていると母親が唐突に口を開いた。

「そう言えば、篭に立派なククルの実があったわね。」
「あぁ……。うん。」

少年はすっかり忘れていた事を思い出したが、見つけた時の嬉しさはどっかへ行ってしまっていて、普通に答えてしまった。

「彼女の事が気になるの？」
「えっ。」

話が急に変って慌てる少年に、母親は「お父さんが帰ったら話しましょう。」と言って黙ってしまった。

第二話　幸せアイスクリーム（前書き）

一回全部消えたっていう><。
書きなおしてたら日付変わってた！

第二話　幸せアイスクリーム

夕飯の準備が早めに終わってしまったので、少年は居間で寛ぐことにした。正面にはまだ名前も知らない少女が、相変わらずボーっとしていた。知らずに少女を見つめる少年は、いつの間にかその可憐さに引き込まれていた。

肩まで伸びた銀色に輝く繊細な髪、深紅に染まった透き通る瞳、肌理の細かい艶々の白い肌。

「フユキちゃん。ちょっとこっちに来て？」

と、そんな母親の言葉で、少年はハッと我に返った。少女は呼ばれるままに、母親と共に居間を出て行った。

「フユキって言うのか……めっちゃ可愛いな。」

少年の呟きは誰の耳にも届くことはなかった。

「じゃーん！」

そんな言葉と共に戻ってきた母親と少女に、少年は目を丸くした。

「どう？　似合ってるでしょ？」

「うん……。」

そう言って少女を見る。どうやら母親のお古を着せたらしい。ちょっとフリルの付いた白いワンピースだった。

少女は恥ずかしげにちょっぴり頬を染めて「ありがとう。」と小声で呟いた。
母親がこんな服を着ていたなんてちょっと想像できないが、少女にはぴったりだと少年は思った。

「この服には少し思い出があってね。捨てずに取っておいたのよ。きっとこの時のためね！」

妙にはしゃぐ母親だった。

「ただいま。帰ったぞー！」

と、そんな時どこかのんびりした、低くてよく通る声が玄関から聞こえてきた。

「あら。帰ってきたみたいね。」

そう言って母親は玄関まで迎えに出る。

「お帰りなさい。」
「おや？　だれかお客さんかい？」

いつもは感じない気配に、父親が母親に尋ねる。

「えぇ、私たちの親友の子が……。」

その言葉を聞いて驚いた顔をした父親は、やがて笑顔になると「そうか。」とだけ答えた。
二人して居間に戻ると、例の少女は椅子に座っており、少年が料理を並べ終えていた。

「おぉ、今日も美味そうだな！」
「「当然でしょ！」」
なにげない一言で、少年と母親の台詞が被った。
（まずい！）
父親がそう思った時にはもう遅かった。瞬間、旋風が吹き荒れた。
「ま、まてまて！　晩飯が……！」
父親の必死の言葉は、もはや届かない。
「今日こそ僕が勝つんだ！」
「ふふ。これで今月も、ハルはお小遣い無しね！」
いつの間にか少年の手には刀が握られており、母親は身の丈ほどの杖を構えていた。
「外！　外でやれ！」
父親の一言で、再び両者は飛び出し、交錯しながら窓をぶち破り、外へと場所を移した。
「い、いったい何が……？」
椅子に座ったまま、微動だにできなかった少女が呟いた。
「始まっちまったのさ、＜幸せアイスクリーム＞が。」

この状態の一体何処が＜幸せ＞で＜アイスクリーム＞なのだろうか。
料理は何とか父親が守ったものの、それ以外はめちゃくちゃになっていた。
というか、外では凄まじい戦闘が行われているらしく、爆音が鳴りやまない。

「幸せアイスクリームって何ですか？」

ちょっと気になって少女は父親に聞いてみた。

「お？　そういや自己紹介がまだだったか？」
「あ、いえ。ヨウヒさんですよね？　私は。」
「あいや、知ってるならいいんだ。フユキちゃんだろ？　王宮に務めてて知らない奴なんていないさ。」

「そうですか。」と俯いてしまった少女に、父親は笑顔を向ける。

「ま、腐った王国に務めてるのもアホらしくて、辞めちまったけどな！」

少女は微妙な表情で「はい。」と言った。

「それで、幸せアイスクリームだったな。」
「あ、はい。」

外では未だに戦闘は続行中らしい。

「確か、どこかの遊びみたいなもんだったかな？　俺も詳しくは知

らないんだが、同じ言葉を同時に言うのが開始の合図で、先に背後をとった方の勝ち、だったか？　そんで勝った方が、負けた方にアイスを奢らせるんだってよ。そんな感じの遊びだ。」

「な、なるほど。」

遊びの内容は理解できたものの、どうしてこんなに激しい事になるのか疑問だった。父親はそんな少女の考えを読んだのか、話を続けた。

「ハルがどっかからその遊びを聞いてきてな。ウチでもやり始めたんだが……。」

と、そこまで言ってご飯を待ちきれなくなったのか、おかずの海老フライを齧りながら父親は続ける。

「アイスじゃなくてお小遣いを賭けてやるようになったんだわ。そんで、ヒィナのやつが大人げなく魔法でハルを吹っ飛ばしてな。」

それから幸せアイスクリームが勃発するたびに、二人とも全力で戦うようになったとか……。あまり二人と幸せアイスクリームをやる機会が訪れないと、少し寂しそうに、それでいて羨ましそうに言う父親だった。

「うぉぉおおお！！」

気合いと共に横薙ぎに刀を振るうも、それは目的に当たることなく空振りになる。

「大振りすぎよ！」

そう言って炎弾を打ち出すも、少年の刀で打ち消される。

「まだまだ！」

地面スレスレまで体を倒し、一気に加速して距離を詰める。魔法を使う者に対して距離を詰めるのは常識であるが、この母親は例外だ。

「よっ！」

油断していると、その杖で魔力付きの一撃を貰うことになるのだ。軽く刀を当て、軌道をずらすとさらに懐へと潜り込む。

（あら、技に磨きがかかってきたわね）

母親は随分と余裕があるようだ。

（ここだ！）

少年は突き出された杖を左手に掴むと、大きく右足を踏み込み全力で刀を薙ぎ払う。これだけ近くに潜り込んで尚且つ杖も掴んでいる、後ろに避けようとしても刀の範囲からは逃げられないはずだ。

しかし、少年の刀はまたも空振った。

「え？」

さらに母親の姿を見失うという失態。

「あ・ま・い・わぁあああああああ！！」

声は下から聞こえた。

「いっ！？」

次の瞬間には顎に衝撃、次いで浮遊感。

しゃがんだ状態からの全身を使ったアッパーをまともに受けた少年は、意識が飛びかける。が、ここで意識を失ったら……。

（死ぬ！？）

空中に浮いているため回避はできないと悟り、全身に力を入れて衝撃に備える。

「前後左右だけで、上下忘れとんじゃないわぁ！」

アッパーから華麗に舞うように回転する母親は、そのままの勢いで少年の胴体目掛けて回し蹴りを放った。

「ふん！」

「ぐぇ！」

少年は木の葉のように吹っ飛び、地面を転がった。

「そこまで！」

と、今まで見守っていた父親が割って入った。海老フライを銜えながら外へとやってきた父親は、母親に向かって「やりすぎだぞっ☆」とデコピンをして、少年を抱えて家へと戻った。母親は「てへ

っ」とか言って反省していないようだったが、これもいつものことだった。

こうして少年のお小遣いは、今月も無しになったのだった。

「次は、絶対勝つ……。」

第二話　幸せアイスクリーム（後書き）

一回全部消えたっていう＞＜。
書きなおしてたら日付変わってた！
ホタルはいいねぇ、癒される＾＾

第三話　家族大会議

部屋の片づけが終わり、夕食後ののんびりした空気の中、居間には全員が揃っていた。

「さて、一息ついたし、これより、第三回家族大会議を開始しようと思う。」

家族大会議。

かなり重要なことを決める時に開催される、この家族の決まりみたいなものである。一回目はハルの名前を決める時に、二回目はここに引っ越す時に行われている。

ちなみに、家族会議と言うのが毎週開催され、そこでは何処に遊びに行くとか、あれが足りないとか、くだらないことを話し合っている。

「今回の議題は、フユキちゃんについてだが。」

「まずは自己紹介をしましょう。」

ということで、自己紹介が始まった。

「俺はヨウヒ。この家の主で元宮廷聖騎士、今は国に追われる立場にあるが、善良な一般民だと自分では思っている。」

「私はヒィナ。元宮廷魔術師でフユキちゃんのお母さんとは親友だったわ。」

そう言ってフユキに微笑みかけるヒィナ。

ハルだけが驚いているようだ。というか、この場にいる者で事情を知らないのは、ハルだけである。

「僕はハル。特技は珍しいモノを見つけることと家事全般、あと剣術。体術と魔術も少し。昔、第一皇女様と遊んだことがあるのが自慢です。彼女無し！　めっちゃ欲しいけど出会いがないので、チャンスがあれば喰らいついて行こうと思ってます。よろしく！」

――キラーン！

ハルが笑顔と共に歯を輝かせ、視線を送る先は……何故かヨウヒだった。ヨウヒは、そんなハルに「ばっちりだ！」と親指を立てて笑っている。

ヒィナは少し、ハルの将来が心配になった。

そして、皆の視線がフユキに集まった。フユキは少し迷ったようだっただ、意を決して話し出した。

「私の名前はフユキです。元……神墜巫女（しんついみこ）です。国に追われて逃げているところを、ハルさんに助けていただきました。」

「っ！？」

何かを言いかけたハルをヨウヒは片手で制した。フユキに視線を送って「続けて。」と先を促す。

「私……神を殺しました。何も考えずに、だた、人々がそう望んでいると思ったから。」

俯いてボソボソと話す声を、誰一人として聞き逃すことはなかった。

「でも、違った。神を殺した時、神の力を手に入れた時に、全部分かったんです。この国は……私を利用しているだけだった。」

神に近付くことができるのは、人々のことを心から思っていることが前提だとされていた。そして、フユキはそう育てられ、そう信じ、神に近付くことができた。そして神を殺し、そこで全てを神から受け継いだらしい。

だが、神になりきれなかったフユキは、その力を手に入れようとしていた王国に命を狙われ、逃げ出したのだという。

「やっぱりな。俺にもっと力があれば、止められたかもしれねぇ。ごめんなフユキちゃん。」

そう言って頭を下げるヨウヒにフユキは首を振る。全ては、自分の罪だ、と。

「ま、やっちまったもんはしかたねぇ。問題はこれからどうするか、だ。」

「そうね。」

暫く考え込むように沈黙が続き、ヨウヒが再び口を開いた。

「フユキちゃんは、神の力を使えるのか？」

「え！？　そ、それは、えっと、引き継ぎには、少し時間がかかるみたいで、今は、使えません。」

俯いて呟くように言ったフユキは、ヨウヒとヒィナが視線を交わしたことに気付かなかった。

「ここには結界が張ってあるわ。しばらくはここで暮らすようにすれば、王国も簡単には見つけられないでしょう。」

「俺もその意見に賛成だ。今日からフユキちゃんもウチの家族って

わけだ！」

「え、でも。」というフユキの意見は聞き入れられなかった。

ハルはずっと黙っていたが「事が大きすぎるから、僕は父さんに任せる。」とだけ言った。

「どうせここにいる皆、国から追われてるんだ。協力した方が断然いいだろ？　ということで家族大会議は終了だ。」

そう言ってヨウヒは家族大会議を終了した。

「続いて、家族会議に移る。議題は？」

「王国も動いてくるでしょうから、それなりの準備と力をつけなくちゃね。」

と思ったら、今度は家族会議が始まった。

「ふむ。じゃ、明日からハルは俺と修行な。」

「うん。」

ハルは割と素直だ。

「で、フユキちゃんは私とね？」

「え、あ、はい！」

「じゃあ、今日はもう寝ましょう。明日からは忙しくなりそうだわ。」

どこか嬉しそうに言うヒィナだった。

フユキも若干まだ余所余所しいが、表情は少し和らいでいた。

「……どう思う？」

子供たち二人が寝静まった頃、ヨウヒとヒィナは居間で相談していた。

「フユキちゃんは光の魔法しか使えないはずよ。だとしたら、きっと神の力は使えないわ。」
「やっぱりか。」
「えぇ……。」
「ということは、国の偉いさん達は？」
「フユキちゃんが追われてる時点でそういうことでしょう？」
「そうか、覚悟しとかないとな。」
「えぇ、私達であの子達を守らないとね。」
「あぁ……。」
「魔物もこれから増えていくでしょうけど、なんとかしないとね！」
「気楽だなぁ。」
「だってここは北の端ですもの。南にだけ気をつければいいでしょう？」
「そういう意図でここまで来たしなぁ。」
「しばらくは村にも行かない方が安全かしらね。」

案外気楽に考えていた二人であったが、このことが大きな災いを招くとは思ってもいなかった。

キルギス王国某所にて。

「巫女はどうやら北の端に隠れているようですが、途中からプッツリ気配が途切れていて……。」
「ふむ、では。広域殲滅魔法であぶりだせばよかろう？」
何気ないように言う老人に対し、若者は慌てたように答える。
「お言葉ではございますが、相手はあの巫女です。それに、そんなことをすれば北の森と周辺の村が。」
「かまわぬよ。神の力さえ手に入ればよいのだから。」
「っ、了解いたしました。」
反論を許さぬ口調で言われた若者は、頷くことしかできなかった……。そして、この作戦は二週間後に実行されることになったのだった。

第三話　家族大会議（後書き）

先を考えずに書いているので、新しい国とか人が出ると、名前考えるのに時間がかかります＞＜。
もちろん主要なキャラのは考えてあるのですが・・・
なにか良い名前ないですかね？（おい

第四話　能力開発～フユキ～

「さて、この辺りでいいかしらね。」

次の日の午後、ヒィナとフユキは森に来ていた。

ヨウヒとハルは、家の前の開けた場所で戦闘訓練をするらしい。

「はい。で、何をしたらいいですか？」

魔術の訓練でもするのだろうと思っていたフユキは、ヒィナの言葉に驚くことになる。

「今日からは、フユキちゃんには神の力を使う為の鍛練をしてもらうわ。」

「え、それって……。」

「いいのよ。神の力は光の力ではないことは知っているわ。」

そう言って笑顔を浮かべると、ヒィナは地面に魔法陣を描き始めた。

「でも、私も詳しく教えてあげることができないから、特別に先生を紹介してあげる。」

魔法陣を描き上げると、「よし。」と頷いて言葉を紡ぐ。

「我、古の契約より命ずる。ｅｗ”９　０ｔ”ｓｍ！」

聞いたことのない言葉を唱えて、ヒィナは魔法陣から信じられないものを呼び出した。見た目は骨で杖を持ち、燕尾服を着た……魔

人だった。

「な！？」

「大丈夫。彼は私の友人だから。」

今まで敵だと教えられてきた脅威を目の前にして、警戒するフユキにヒィナは落ち着くように言う。

「よーほ！お久しぶりですな、ヒィナ様。」

現れた骨は恭しくお辞儀すると、ゆっくりと歩み寄って来た。まるで何処かの貴族のようだと、フユキは思った。

「お久しぶりです、ギーカルス卿。」

本当に友人らしく、笑顔で対峙するヒィナを見てフユキは驚愕した。

「こちらは？」

「神ですわ。」

「ほほぅ！」

骨なので表情は分からないが、声からして驚いているようだ。ヒィナはギーカルスと簡単に話をして、フユキを側に招いた。

「お初にお目にかかる。我が名はギーカルス。フユキ様、ですか。神の力はどのくらい？」

突然話しかけられ緊張した様子のフユキだったが、ヒィナが側に寄り添ってくれたおかげで、普通に話すことができた。

「えっと、フユキです。力は、実を言うとサッパリなんです。」
「そう、ですか……。ではまず、世界をイメージなされよ。」

フユキは素直に従った。
目を閉じて、世界をイメージする。すると、はっきりと世界が見えた。世界地図を、上から見下ろしたような感じだ。

「何が見えますかな？」
「世界地図、みたいな感じです。」
「よろしい。では、次に光をイメージなされ。」

言われた通りにすると、世界地図全体に明暗が現れるようになった。

「これは……？」
「できたようですな、それがこの世界の貧困の差を現しております る。」

言われた通り、確かに明るいところは各国の王都であったり、自然の残る未開の地だったりした。逆に暗いところは、戦争が起きていたり、砂漠地帯だったりするところだろう。

「次は闇を。」
「はい。」

すると、今度は世界地図の大陸のあちこちに黒い靄が現れた。それは各靄の中心の点に向かっているように見えたが、一番外側の薄い部分は少しだけ外に向かうか、その場に留まっている。

「その靄は我ら闇の民、魔人や魔物を現しており、中心にある点はゲートと呼ばれるモノで、我らの住む闇の世界と繋がっております。」
「はい。」

フユキはそっと目を開いた。イメージしていれば目を開いた状態でも、脳裏にそれが見えることにフユキは少し驚いた。
その後もギーカルスの講義は続いた。フユキには信じられない内容だったが、どこにも矛盾は見当たらず妙に納得していた。
真実なんて、案外こんな感じなのかもしれない。

「フユキ様次第で、この世界は元通りにも、闇の世界にもなってしまうのですじゃ。もちろん我ら闇の民の大半は、そのようなことをよしとはしませんがの。」
「人間は、勝手ですね。」

悲しそうに言うフユキに、ギーカルスは驚いた。

「我らとて、そこはあまり変わりますまい。」
（さすがは神といったところですかのぉ……。しかし、これはこれで危険。）

「フユキ様。貴女様には世界を視る目がある。それは真実を見分けるためにも使えましょう。私の言ってることに、嘘偽りがないとは保証できますまい？　すべては自分で見て、聞いて、考えてから判断するのがよろしかろう。全てを鵜呑みにするのは危険。時には疑うことも必要なのですじゃ。」

そう言うギーカルスに、フユキは首をかしげて言い返す。

「え？　ちゃんと疑っていますよ？でも、ギーカルスさんの言葉には嘘がありませんでした。私は人間です。貴方の言っていたことに少しでも嘘が混ざれば分かります。たとえそれが真実でも、それでもやっぱり、私は人間の味方であり続けたいです。」

その瞳には力が宿っていた。時に瞳は、その言葉よりも深く相手に意思を告げる。

「ほほほ！　今度の神もまた素晴らしい魂をお持ちのようだ。このギーカルス、力の及ぶ限り貴女の力となりましょう！」

それまで黙ってフユキの隣にいたヒィナは、「よかったわ。」と微笑むのだった。

こうしてフユキはギーカルスという師を得て、神の力を鍛えていくことになった。

第四話　能力開発～フユキ～（後書き）

だんだん短くなってるけど気にしないんだ。
というか、ホントならもっと話が進むはずだったんだけど。
先を考えてないからお話がどんどん変わって行ってます＞＜。
早く次の段階に書き進めたいです・・・。

感想こないかなぁ～

第五話　新刀入手～ハル～（前書き）

書き方変えました。
少しは読みやすくなったかしら？
そうだといいなぁ。

第五話　新刀入手～ハル～

「よぅし！　今日は訓練の前に、ちょっと地下行くぞ。」

ヒィナとフユキが出かけて暫く、ヨウヒはハルを伴って裏庭にやってきた。家の真後ろに、目立たないが地面の色が他より薄いところがあった。そこに立ったヨウヒは、徐に持っていた透き通る青い剣を突き立てた。

「オープンセサミィ！」

ちょっと間抜けな合言葉を唱えると、ヨウヒの姿が掻き消えた。ハルはため息を一つ、誰も見ていないのだがこれを唱えるのは相当に恥ずかしい。腰から刀を引き抜くと、先ほどのヨウヒのように地面に突き立てる。

「オープンセサミ！」

意味は、たぶん＜開けゴマ＞だ。
唱えると同時に景色が変わる。とある地下迷宮に転移したのだ。
転移魔法は、あらかじめ魔法陣を二か所に設置していれば、起動に少しの魔力を使うだけで転移できるというすぐれものだ。
ちなみに、設置するにはヒィナでも数日は要するし、設置しないで行うには数人の宮廷魔術師が数人集まって、やっと一人を送り出せるという難しいものである。

「来たか。今日は最深部まで行くぞ！　気合い入れてけよ。」
「うん。」

ハルはこの地下迷宮に、何度か来たことがあった。たまに実践訓練だと言って、ヨウヒが連れてきていたのだ。
最深部には最短で一時間ほどかかった記憶がある。ほぼ一本道ではあるが、細い脇道が多数存在し、魔物もかなりの数がいるはずだ。

「実はな、昨日ちょっと掃除しておいたからな。かなり楽なはずだが、油断はするなよ？」
「分かった。」

言葉少なに二人はどんどん進んでいく。
途中ラットマンとかいう、雑魚だが大量の魔物と遭遇したが、ヨウヒが「どけ。」と言うと脇道に逃げて行った。
先にハルが「どけ。」と言った時には五分の一ほどが逃げ出していた。

（ハルはまだまだだなぁ……。）

そんなことを思うヨウヒだった。
その他にはさほど魔物にも遭遇することなく、二人は最深部までやってきた。
床や天井が薄く発光したしており、何とも幻想的な空間だった。
一番奥に祭壇があり、その祭壇に続く階段の前にそれはいた。

「ｇｑｔ　０ｔ”ｓｍ９」

耳慣れない音を発したそれは、魔人だった。
警戒するハルを余所に、ヨウヒはそれと対峙すると、同じ言語で会話し始めた。

「」ｒｂｉ　ｔｑｕ０　ｘｒ”：ｑｅ」

「ｄｔ＾ｆ？」
「ったく、６ｊ５ｔ”　ｎｇ０／ｗｈ；」

そこで魔人が頷いたのを見て、ヨウヒがハルに向かって「ぶっ倒してこい。」と言った。
ハルは頷いて、前に歩み出る。刀を抜き放ち、相手を見た。
身長はヨウヒと同じくらいだから、たぶん百八十前後。赤い肌に、鋭い爪と牙、頭には角が二本ある。まるで鬼のようだ。
しかし武器は金棒ではなく、ハルと同じ刀のようだった。

「行きます！」
「ｊｅ．！」

同時に飛び出してほぼ真ん中で切り結ぶ。激しい音と衝撃で、火花が散った。

「ぐっ！」

早さは僅かにハルが上だったが、力では鬼が勝った。ハルは刀をずらして、相手の懐に潜り込む。
と、鬼の膝が迫ってきた。

「ちっ！」

咄嗟に肘でガードして、その勢いで一度距離をとる。着地と同時に再び前へ。左の肘が多少麻痺していたが、構わず突っ込み、下から切り上げるようにして刀を振るう。
対して鬼は、上から切り下げてきた。
再び刀が火花を散らす。
ハルは最初の一太刀で、速さでの勝負に出ると決めていた。次か

ら次へと絶え間なく、隙無く攻め立てる。ジリジリと鬼を下がらせていくが、鬼も隙を見せないので決定打を打ち込めないでいた。
先に根を上げたのはハルだった。一渾身の力で横薙ぎに刀を振るうと同時に、後ろへと下がる。
しかし、鬼はそれを許さない。鬼はハルに追随し、今度は攻守が逆転した。
防戦一方で攻めに転じることができないハルは、次第に体力が削られ息も切れ切れになっていた。
というのも、鬼の一撃一撃がとても重いからだ。ただでさえ、刀というのは折れやすい、攻撃をただ受け流すだけでも相当の集中力が必要なのだ。
そして、ハルの集中力がついに尽きた。

「ぐあっ！」

鬼の刀が、ハルの右脇腹を切り裂く。鮮血が飛び散るが、幸いなことに傷はそこまで深くなかった。
尚も果敢に攻めようとしたハルだったが、鬼の渾身の一撃に刀をはね上げられる。

「ｅｕｄｑｑ”ｓ！？」

とてつもない威力に右手から刀が手から離れそうになるのを、ハルはただ必死に握りしめていた。
何故か驚いたような声を上げた鬼だったが、間を空けずにガラ空きの体に前蹴りを放ってきた。
まともに貰いはしたが、ハルはなんとか踏みとどまる。
が、鬼も甘くはない。チャンスとばかりに、今度は右腕に蹴りを入れてきた。
ガードできたのはそこまでだった。右腕にもはや力は入らなくな

った。
次の膝蹴りは鳩尾に深く入り、全身から完全に力が抜けてしまった。最後とばかりに放たれた、鬼の左のハイキックはハルの左側頭部に綺麗に決まった。
勢いに押されて右に数歩フラついた後、ハルは意識を失ってその場に倒れ伏した。

「あはは！　やっぱジオに勝てるわけねーか！」
そう言って、祭壇に続く階段に腰掛けたヨウヒは大声で笑っていた。
そこへハルを担いで先ほどの鬼、ジオがやってきた。
「笑うことはないだろう？　彼は十分に強かった。」
そっとハルを横たえると、ジオはヨウヒの隣に腰を下ろした。
「正直、あの一撃で刀を折るつもりだったのだが……、この子には驚かされたよ。」
「まぁな。刀に対する礼だけは教え込んでるつもりだ。」
「なるほどな、最後まで刀を離さないわけだ。」
「で？　ハルは合格か？」
「あぁ……なにせこの俺に剣を折らせず、尚且つ最後まで手放さなかったその心。称賛に価する。」
「そうか。じゃあ、遠慮なくもらっていくぜ？」
「かまわない。」
そうして暫くしてハルが目覚めるまで、二人は世間話に興じるの

であった。

「うぐ……。」

「おや、お目覚めか？」

起き上がろうとして、脇腹にある傷に顔を顰(しか)めるハルはそこに包帯を見つけた。

「これ、父さんが？」

「いや、ジオがやった。」

そう言って、隣に視線をやると先ほどの鬼が立ちあがった。

「やっぱり、父さんの知り合いだったのか。」

「気付いてたのか？」

「だって、普通に会話してたじゃん。」

自然な感じで肩を支えてくれるジオに感謝しながら、ハルは立ちあがった。

そして、導かれるままに階段を上って祭壇の前にやってきた。

「４：ｓ；」

鬼の言葉をヨウヒが通訳して、ハルはそこにあった一振りの太刀を手に取った。

長年使ってきたようにしっくりくるその刀を、ハルは抜き放ってみる。

「あぁ……。」

思わず感嘆の息が漏れるほど、その刀は美しかった。
漆黒の刀身に緩やかな曲線を描き、そして妖しく黒い光を放っていた。
身の丈ほどもあり、脇に差していては抜き放つ事が出来そうにないそれを、鬼が背中に背負えと言ったのでそうすることにした。
それでも抜き放つには無理があったが、どういうわけかその刀は抜こうと思えば抜け、しまおうと思えば背に背負った鞘に近付けるだけで鞘へと収まった。
「＜妖刀・澱神（おりがみ）＞だ。いずれ、ハルにも刀の声が聞こえるだろう。」
ヨウヒは微笑むと、「よくやったな。」とハルの肩を叩いた。

鬼にお礼を言って家の前まで戻って来た時、ヨウヒと訓練をする為に以前使っていた刀をハルが抜くと、半ばから綺麗に折れていた。
「澱神め。嫉妬したな……。」
どうやら澱神が、自分以外を使うのを嫌ったのだろうとヨウヒは語った。
そして「澱神に俺の愛剣を折られちゃたまらんわ！」と言って、ヨウヒはハルに剣術は地下迷宮の魔物で腕を磨くように言うのだった。
こうして、ハルは新しい刀＜妖刀・澱神＞を手に入れたのだった。

第五話　新刀入手～ハル～（後書き）

よく操作を間違って、文章を大量に消す……どうもヒナです；
ＰＶが１００突破しました！＾＾
読んでくれた皆、ありがとう！
お気に入り登録してくれた方、ホントにありがとう！
感想くれた方、感激で死ぬかと思いました！ありがとう！！
１００は少ない？それでも私にとっては記念なんだいっ！

ちなみに魔物言語？は……なんだっけ？
ヒナ＝ｖｕ　間違えてても気付きにくいっていう＞＜。
あまり使わないようにしなければ。
って、また日付変わってる；
おやすみ！

第六話　とある夕食の大惨劇（前書き）

ちょっとマズイ表現があるかも；
イメージ崩さないようにしないとね……。
お食事中や前にはお勧めしませんー。

第六話　とある夕食の大惨劇

「おぉ！　今日も飯が美味、そ……うそだろ！？」

いつものように夕食の席に着いたヨウヒは、思わず我が目を疑った。

一日の中で一番楽しみにしている晩御飯が、阿鼻叫喚の地獄絵図になっていたら、だれだってこんな反応をするだろう。

「ご、ごめんなさい！　まさか、こんなことになるなんて……。」

「き、気にしないで！　誰だって最初はこんなものだよ！」

「そ、そうよ。そのうち上手に作れるようになるわ。」

ションボリと項垂れるフユキに、ヒィナとハルが慌ててフォローに入る。

なんだかんだいって、フユキがこの家に来てから一週間が経とうとしていた。

だいぶ馴染んできていたそんな時、フユキが何かお手伝いがしたいと言ってきたので、料理をしてもらうことにしたのだが……。

「俺の、一番の楽しグェ！？」

悲しみに打ちひしがれていたヨウヒの言葉は、笑顔のヒィナの拳によって中断された。

未だに申し訳なさそうにするフユキを席に着かせ、謎の食事が開始される。

いや、謎ではないか。途中まではヒィナとハルが仕込んでいたのだから。

まず目につくのは、紫色のドロドロしたスープ、のようなもの。

たぶん元はシチューだったはずだ。というか、元は確かにシチューなのだが、あまりにもかけ離れたモノになっていて、断言できない。
サラダには、どこから作り出したのか謎の、青色の液体がかかっていて、野菜の一部が溶けている。正直、食ったら死ぬんじゃないかと思う。
そして、食卓にある中で唯一被害を受けなかったモノがあった。ご飯である。その真っ白さが、他のものの異質感を極限まで高めている。

「ゴクリ！」

全員が身の危険を感じながらも、フユキの様子を窺う。
まだ落ち込んでいるらしく、俯いたままだ。
そんなフユキを横目に、家族の醜いアイコンタクトが始まる。

（おい、ハル食ってみろよ。フユキちゃんの手作りだぞ？）
（い、いや。父さんいつも夕飯楽しみにしてるじゃない？お先にどうぞ！）
（え、ちょっ。ヒィナ、何とか言ってやれ！）
（そうね、貴方の台詞で、フユキちゃんかなり傷ついてるんじゃないかしら？　私とハルがフォローしたんだから、頑張ってねア・ナ・タ☆）

ヨウヒは愕然とした。基本的に多数決でこの家族の方向性は決まる。だとしたら、最初にこれを食べるのは自分の役目になったということだ。
改めて目の前の料理に視線を向けてみる。
出来立てホヤホヤで蒸気が立ち上っているが、信じられないことにそれが僅かに紫色だったりする。
ヨウヒはスプーンに紫色の物体を掬い上げ、ゆっくりと口へ近付

ける。
手が震え、汗が額を流れる。
（いくぜ！）
意を決して、スプーンの上の物体を口に含もうと息を吸った瞬間、ヨウヒの意識は吹っ飛んだ。

開けた口にスプーンを突っ込む直前で固まったヨウヒを見て、ヒィナとハルは首をかしげた。
まだ謎の物体はスプーンの上にあり、ヨウヒはまだその味すら確認していないはず。
と、ゆっくりとヨウヒの目が上を向き白目になると同時に、その体がゆっくりと前に倒れてきた。
――ガッシャーン！
ヨウヒの顔面は、紫色のドロドロしたスープが入ったお皿に激突した。
同時に三人が動き出す。
音に驚いたフユキが顔を上げ、その視線を塞ぐようにハルが身を乗り出し、ヒィナが魔法でヨウヒとその料理を吹っ飛ばす。
――パリーン！　……ドサッ。
――シーン……。
先週直したばかりの、真新しい窓が再び割れた。木端微塵に。

「えっ？　えっ！？」

何が起きたのかとオロオロするフユキに、ヒィナは笑顔で言った。

「あら、ごめんなさい。ちょっと……くしゃみが、ね？」

「……え？」

「も、もう！母さんったら、くしゃみするときは手を添えてっていつも言ってるじゃんか！」

「ごめんさいね。とっさで間に合わなくって……てへ☆」

かなり無理のある発言だったが、フユキはフユキで（ヒィナさんのくしゃみって凄いんだなぁ。）とか思っていた。

そして、第二の被害者が出る。

（後は任せたわよ。）

（そ、そんな無茶だよ！　父さんの見たでしょ！？　きっと物凄い劇物だよ！）

慌てるハルにヒィナはそっと首を振り、笑顔を浮かべた

そして、そんな微笑みと共に、ヒィナは徐にサラダを一口。

「あ……ど、どう、ですか？」

今度は料理を口にするところを見たフユキが、ヒィナに感想を求めた。

逃げ場がないかと思われたヒィナはしかし、無言で極上の笑みを浮かべた後、スッと席を立って部屋の外へと出て行った。

――ガチャン、パタパタ……バタバタバタ、ドン！　バン！　ジャーザザザ……。

どうやらトイレへと駆け込んだらしい、後半の慌てぶりが半端ない。
しかも聞いたことのない、地獄の底からはい出してきた悪魔のようなうめき声が、水の流れる音と共に聞こえてきた。

「……。」
「あ、あぁ！　もしかして母さんできちゃったのかも！」
「え？」
「お、弟かな？　それとも妹かな！？」

ハルのフォローも限界だったのか、あり得ないことを口走ってしまった。

「そ、そう。おめでとう？」

そう言ってフユキは、何気なくスープを一口食べた。
ハルが止める間もなかった。
そして、ゆっくりとフユキの体が傾いてゆく。ヨウヒと同じ運命を辿るかと思いきや、顔面がスープに激突する直前に、ハルがフユキの体を支えた。

「ど、どうしよう……。」

自分以外の全員が全滅するという事態に、しばし途方に暮れるハルであった。とりあえず、無事であろうご飯だけを残さず食べた。

「ふぅ、やっと片付いたか。」

そう言って居間の椅子に腰を下ろしたハルは、先ほどの地獄絵図を思い出す。
フユキは、まぁ……ちょっと口から泡を吹いていたけど、解毒魔術とかを適当にかけて部屋に寝かせた。
ヒィナは、あまり言いたくはないが、トイレに頭を突っ込んで気を失っていた。何故か涙が出そうになるのを堪えて、浄化と解毒を施して、こちらも部屋へ寝かせた。
ヨウヒは一番悲惨なことになっていた。ガラスの破片とかで顔面は血だらけ。仰向けに倒れているのはいいのだけれど、椅子を下敷きにしてエビ反り見たいになっており、鼻にはスプーンの柄が刺さっていた。体はスープとサラダのドレッシングでドロドロになっており、服が焦げていたり、溶けていたりしたし、時々ビクッと痙攣するのがハルの恐怖心を大いに煽った。
ヨウヒを綺麗にして部屋まで運ぶには、ものすごく苦労した。
そして、その後料理を処理して（もちろん食ったわけではない）、窓に応急処置を施して今に至る。

「フユキの料理は、危険すぎる。」

そう呟いて、二度とキッチンには近づけないようにしなければと、決心するハルであった。

余談ではあるが、次の日の朝。誰一人として夕食の惨劇を覚えている者はいなかった。ハルもあれは悪い夢だったと、忘れることにしたのだった。

第六話　とある夕食の大惨劇（後書き）

女の子が泡吹くとか、表現が失敗だ＞＜。
いつかはフユキの可愛さとか書けたらいいなぁ。
ちなみにあのドロドロスープ、香りはシチューらしいです。
湯気を吸いこむだけで気絶するってあり得ないね。

もう少し、この平和な日常を続けようか、物語を動き出させるかで少し迷ってます。
どうしよっかなぁ；

第七話　家族

「ハル！　ま、待ってよ！」

地獄の晩餐会から数日後。

森の中には篭を背に疾走するハルと、それを必死に追いかけるフユキがいた。

「フユキはそこで待ってて！　すぐ戻ってくるから！」

「やだっ！」

ハルは後ろにフユキの存在を感じながら、前の標的から視線を外さない。ハルの前をひた走るのは、大きな鹿だった。

鹿は後ろ脚を引きずっており、全力で走ることができないようだ。

ハルは腰からナイフを抜き、勢いのままに鹿に飛びつこうとした。

「きゃっ。」

その瞬間、後ろを走っていたフユキが小さな悲鳴と共に転んだ。

ハルは思わず後ろを振り返り、鹿に飛びかかる機会を失ってしまった。

しかし、フユキに怪我がないことを確認したハルは、素早く視線前に戻し、鹿に向かって全力でナイフを投げつけた。

「せいっ！！」

――ヒュンッ！　ドスッ！

そんな、音を立てて真っ直ぐに飛んだナイフは、見事に鹿の後頭部に突き刺さった。　鹿は、数歩よろめいた後に地面に倒れた。

それを確認したハルは、フユキの元へ駆け寄る。

「フユキ、大丈夫？　怪我はない？」

「ぅん……。」

フユキは少し涙目になって地面に座り込んでしまっていた。ハルはフユキの服に付いた土を軽く払ってやって、優しく手を握って立ち上がらせた。

出逢った頃は、凛とした大人な感じがしていたフユキは、ヨウヒ達と暮らすようになってから、何だか少し子供っぽくなっていた。

――幼児退行？

フユキの無事を改めて確認したハルは、先ほど仕留めた鹿の血抜きを軽くしておいた。走り疲れたこともあって、暫く休憩することにした。

「それにしても、ハルは凄いね。」

「え？　何が？」

首をかしげるハルに、フユキは答えた。

「だって、食べれる野草とかいっぱい知ってるし、鹿まで仕留めちゃうんだもん。」

「あぁ……。フユキだって暫くすれば、いっぱい覚えるさ。今だってもう、食べられる茸とか覚えたでしょ？　僕より断然覚えるの早いよ。」

「へへ……そうかな？」

少し照れて笑うフユキに、ハルは「そうだよ。」と言って笑った。

傍から見た二人は、仲の良い兄弟にも、幼心にお互いを想い合う者にも見えた。

「それじゃあ、帰りは僕が鹿を背負うから、フユキは篭をお願いできる？　ちょっと重いかもしれないけど……。」
「うん！　任せて！　……でも、こんな大きな鹿、ハルは運べるの？」
「たぶん、身体強化の魔術とかあるし大丈夫だと思うよ。」

十分に体を休めた二人は、自然な感じでお互いを気遣いながら家を目指すのだった。

「ヒィナさん！　見てくださいよこれ！」

家に帰るなり、フユキはヒィナを連れて外に出た。そこにはハルが仕留めた鹿が、地面に横たわっていた。ハルは身体強化の魔術で鹿をここまで運んできたものの、さすがに疲れたらしく地面に大の字で寝転がっていた。

「まぁ。こんな大きな鹿、中々いないわよ？　流石ハル、珍しいものを見つける嗅覚は尋常じゃないわね。」

ちょっと驚いて見せたヒィナの言葉に、ハルは体を起して「それ褒めてる？」と微妙な顔で笑った。
まるで自分が仕留めたかのように喜ぶフユキと、笑顔で話すヒィナはとても仲の良い親子のように見えた。

「今日は久しぶりに、お肉を贅沢に使った料理を作りましょうか。」
「あ、手伝います。」
「バッ――んご飯が楽しみだなぁ！」

突然大きな声を出したハルに、二人は視線を集中させる。

「で、でもさ、フユキは今日いっぱい走って疲れたろ？　晩飯のてつだいくらい俺がやるし、ゆっくり休め、な？」

「う、うん……。」

妙な剣幕で諭すように言われ、フユキは思わず頷いた。

（あぶねぇ……。　バッカ！　あの惨劇を繰り返すつもりか！　とか言いそうになった。）

内心冷や汗でいっぱいのハル。仲良くなるのは良いが、配慮に欠けた発言をして、あの日のことを思い出させてしまうところだった。

とはいえ、いつまでも逃げるわけにはいかないので、次回は野菜とかを切る手伝いをしてもらおうと企画するハルだった。

（切るだけなら、大丈夫だよな？）

一方ヒィナはというと、ますますハルの事が心配になるのだった。

（なんだか、変な子になってきたわねぇ。）

ちょっと不憫なハルだった。

「おほぉ～！今日も晩飯が美味そうだぁ♪」

最近の夕食時、ヨウヒはやけに上機嫌になる。ハルは原因があの

惨劇にあるのではないか、と内心思っていたりする。
今日の夕食は、鹿肉のステーキに真っ白なご飯とサラダ、鹿肉入りののスープだった。

「今日はね！　ハルが凄かったんですよ！」
「ほほぅ！　どんな感じにだ？」

楽しそうに今日の出来事を話すフユキは、本当に年相応の女の子だった。
ヨウヒもヒィナも、フユキを本当の娘みたいに可愛がっている。

「鹿に向かってナイフをブン！　って物凄い勢いでした！」
「そんなに凄いことかな……？」

ハルは少し照れたように、それでいて満更でもないように言う。

「ふふ。ちょっと前までは逆に鹿に追いかけられたりして、泣いていたのにね。男の子の成長は早いわ。」
「ちょっ！」
「あぁ、あれは爆笑もんだったな！」
「へぇ！　もっと詳しく教えてください！」
「やめろよフユキ！」

いつの間にかフユキを含め、どこからどう見ても仲の良い家族の団欒にしか見えないようになっていた。ここにいる半数以上が王国に追われている身でありながら、そのことを微塵も感じさせない、幸せそうな家族の姿。それは、とても素敵な光景だった。

第七話　家族（後書き）

んー、まさかこんなことになるとは……。
いいですね、家族って。
私の家は家族の仲が良い方だとは思いますが、時々疎外感を感じる私がいます；
私が大学に通っていた頃私は一人暮らしだったので、その頃実家で起きたことを話題にされると家族に置いて行かれます＞＜。
ファミレスに家族で行ったのに、テーブルが狭くて私だけ隣のテーブルで夕飯を食べた時の虚しさといったら……。

次回は少し遅くなるかもしれないです；
できるだけ早く書いて上げるようにします！

第八話　広域殲滅魔法

キルギス王国、北東の端の村にて。

「おや？　雪だ。今年初めてか？」

「あぁ、初雪だな。最近寒かったしな……。」

村人たちが空を見上げると、確かに雪がチラついていた。

その時、初雪に空を見上た人々は驚きの声を上げた。それにつられて、側にいた人々も空を見上げる。

「なんて、綺麗なんだ。」

思わず感嘆の息が漏れる村人たちが見上げる先、そこには巨大な光り輝く魔法陣が展開されていた。

久しぶりに村へとやってきていたヨウヒは、初雪に空を見上げると同時に唖然とした。

（まずいっ！）

驚きのあまり少しボーっとしてしまったヨウヒは、持っていた荷物を投げ捨て、思い出したように走り出した。向かう先は、この村の村長の屋敷だ。

ノックもせずに扉をブチ破りながら転がり込んできたヨウヒに、屋敷の主は驚きに目を丸くする。

「これはまた……ヨウヒ？　何があったのじゃ？」

入ってきたのがヨウヒだと分かると、村長は顔を引き締めてそう聞いた。

「大変だ。王国が攻めてきた！　ここら一帯を焼き払うつもりだ！」
「なんと！？　そんな話は聞いておらんぞ！」
「もう時間がねぇ！　最初の魔法だけは何とか防ぐから、村長は村人を頼む！」
「ま、まて！」

それだけ言って再び外へ駆け出そうとするヨウヒを、村長は思わず呼び止める。しかし、言いたい事が上手く言葉にならないようで、ただ口を開けたり閉じたりを繰り返していた。
そんな村長を見て、ヨウヒは思わず笑ってしまう。

「心配すんな。皆が逃げるだけの時間は必ず稼ぐ。」

しかし、ヨウヒのその笑顔もすぐに消えると、今度は申し訳なさそうな顔をして小声で言う。

「……俺たちのせいで、すまない。」

村長はまだ何か言いたそうだったが、時間が惜しいヨウヒは今度こそ屋敷を飛び出した。
ポケットから様々な色の小さな宝石の欠片を取り出し、村中に撒き散らす。時間がなく丁寧に対処する余裕がない。大雑把に撒き終わると、今度は村の出入り口である、小さな門まで走った。到着するなり愛剣を引き抜き、地面に大きな魔法陣を描き始める。

（なんとか間に合いそうだぜ……。）

複雑な模様も慣れた手つきで地面に刻み、最後に陣の中心に立つと愛剣を中心に突き刺す。ゆっくりと魔法陣が輝きだし、それに反応するように村中に撒き散らした宝石が淡く光りだす。やがてぼんやりと村全体が光に包まれて、ヨウヒは一息ついた。

空に輝く魔法陣も光を増しており、いつ発動してもおかしくない状況だ。

ヨウヒは剣の柄に両手を乗せたまま後ろを振り返る。そこには王国から追われていた自分達を温かく迎え入れてくれた村と、追手から自分達を隠し守ってくれた森があった。

そして何より、その先には守るべき愛する者たちがいる。

ヨウヒは目を閉じると、前を向き精神を集中させた。

それと同時に空の魔法陣が発動し、強大な破滅の魔法が放たれた。

（ヒィナ、子供たちは任せたぞっ！！）

魔法が着弾する寸前に、ヨウヒは結界を起動させる。

――バチィィイイィィイ！

「ぬう！？」

凄まじい轟音を響かせ、ドーム状の結界が魔法を受け流すように弾く。村が小さく結界の範囲は狭いものの、ヨウヒ一人では結界が持ちそうにない。

しかし、ヨウヒは慌てることなく片手を剣から外し、ポケットに入っていた真っ赤な三つの宝石を取りだした。

「ヒィナ、俺を守ってくれ……。」

静かに言って、ヒィナが魔力を籠めたそれの一つを口に含む。一番大きなペットボトルの蓋くらいの丸い宝石だ。口に含んだ瞬間に、焼けるように熱くなるそれを噛まずにそのまま嚥下(えんか)する。瞬間、腹の底から魔力が溢れて来た。しかし、その魔力もあっと言う間に消費していく。

ヨウヒは迷わず二つ目の宝石を口に含んだ。先ほどのより一回り小さい、三角の宝石だ。

「ごふっ！」

無理やりに異物を喉の国に押し込もうとするが、体がそれを拒否している。そのうえ三角の宝石は、とても嚥下し辛い。構わず無理やり飲み込むと、すぐさま三つ目を口に放り込む。小指の先ほどの大きさの、星型の宝石だ。焼けそうな口内と喉、そして体の中心を無視し、それを強引に嚥下した。

「ガハッ！」

ついに吐血までしたヨウヒは、自分の張った結界に目をやる。魔石による魔力補充をしたものの、もう限界に近い。やがて、結界にヒビが入り始め、そして……砕け散った。

（畜生がっ！）

ヨウヒは最後の力を振り絞り、地面から引き抜いた愛剣を構え、自ら魔法へと突っ込んで行った。

「斬り裂けえぇえぇえぇ！！」

そして辺り一帯は、轟音と共に光に包まれた。

「ヒィナさん。この食器は何処でしたっけ？」

キッチンで片づけを手伝うフユキは、両手でお皿を持ってヒィナに聞いた。

「それは棚の一番左側の下よ。それが終わったら、ハルのお手伝いに行ってちょうだい。」

片付けもほぼ終わりかけていたので、ヒィナはそう言って笑顔を見せた。「はぁい！」と元気よく返事をして、お皿を片づけたフユキは外で菜園のお世話をしているハルの所へ向かう。

ハルは湖から汲んで来た水を、菜園に撒いている所だった。

「ハル、手伝いにきたよ！」

「おぉ。ありがとう。じゃあ僕と交代して水を撒いてくれる？　僕は裏から肥料を取ってくるから。」

快く引き受けたフユキに後は任せて、ハルは家の裏へと肥料を取りに行った。暫くしてハルが戻り、二人して菜園の虫を駆除したり、収穫をしたりした。

最初の頃「どうして魔術で世話しないの？」とフユキが質問したことがあった。それに対してハルは「魔術を使わずに愛情を籠めて育てた方が、美味しいのができるんだ。」と答えていた。

そんな訳もあって、二人はせっせと魔術に頼らずに菜園のお世話をするのだった。

一通りのお世話が終わり家に収穫した野菜などを運び込んでいた

時、家にいた三人は急に膨大な魔力を感じた。

「これは……！？」

慌てて外に飛び出すヒィナを追って、ハルとフユキも後に続いた。そして三人とも驚愕した。それもそのはず、南西の空一帯を覆うような巨大な魔法陣が、そこに展開していたのだ。

「大変だわ！　ハル、すぐに家の結界を発動させてきて！」

「わ、分かった！」

「フユキちゃんは、私に力を貸してちょうだい！」

「はい！」

ハルは家へと駆け込むと、屋根裏部屋に上がった。そしてその部屋全体に描かれている魔法陣の中心に立つと、結界を発動させた。

「これで、よし。」

結界の発動をきちんと確認して、一階の倉庫から宝石をいくつか抱えて再び外へ出る。チラリとヒィナとフユキに視線をやると、二人は一心不乱に魔法陣を地面に刻んでいた。

ハルは二人に声をかけることなく泉へと走り、宝石の一部を投げ込んだ。次いで、家の周りに点々と宝石を置いて行く。ぐるりと一周する頃には、抱えていた宝石は全て無くなっていた。

「母さん！　終わったよ！」

「森にも、結界を……。」

ヒィナがそう言いかけた時だった。空中にある魔法陣が急に輝きを増したのだ。

「来ます！」
「ハル、ここに！」
「任せて！」

三人は其々、地面に描かれた三つの魔法陣の中心に立った。
右側のハルは妖刀＜澱神（おりがみ）＞を引き抜き地面に突き刺し、中心のヒィナは愛用の杖を召喚して構え、左側のフユキは両手を胸の前で祈るようにして精神を集中させた。
それと同時に、空中の魔法陣から魔法が放たれた。魔法が迫り来て、ヒィナ達に着弾するかと思われたその時、ヒィナが大声で叫んだ。

「我らを守れ！　：Ｚ２’ｇｋｔ＾”！」

――バキィイィイイ！　ドドォオオォオオン！！

凄まじい衝撃と爆音に包まれてから、数秒にも何時間にも感じる時間が経過した。気付いた時には辺り一帯が更地になっていた。
たが、ヒィナ達は生きていた。三人とも大量の魔力を消費したので息が上がっており、額からは滝のように汗が噴き出している。

「ハル……、転移魔法陣の、確認、してくれる？」

息も絶え絶えに言うヒィナに、ハルは頷きだけを返し、家の裏手に回る。そして、ハルの顔が後悔の念で彩られた。

（しまった……魔石を置く時に、転移魔法陣のこと忘れてた。）

宝石で取り囲んだ家は無事だったが、裏の転移魔法陣は半分から

後ろが消し飛んでいたのだった。

第九話　迫り来る脅威

キルギス王国、王宮某所にて。

「右大臣様！　報告、申し上げます！」

とある部屋に、老人と騎士の若者がいた。控えめなれど豪華な服に身を包んだ老人は「うむ。」と答えると若者に続きを促す。

「北東の森は広域殲滅魔法によりほぼ壊滅。一部、村とその奥の森の一部、および湖の周りには損害無しとのことです！」

「ほう。あれを防ぐとはのぅ。では、全兵力を持って、その場所を攻撃せよ。神以外は全員殺せ、神は必ず生きたまま捕らえよ。」

「はっ！」

若者は老人に対し敬礼すると、部屋から出て行った。

「ふふふ……。もうすぐ、我が手に神の力が！！」

残された老人は不敵に笑い、そしてゆっくりと部屋を出て行った。

「ぬぅ……？

ヨウヒが目を覚ますと、そこは村の中央広場のようだった。三人ほどの魔術士がヨウヒの治療をしており、周りでは忙しそうに村人たちが動き回っている。

「あ、気がつかれましたか？」
ヨウヒの呻き声に反応して、治療をしてきれていた魔術師の一人が声をかけてくる。
「ここは……？」
「待っていてください、今村長をお呼びします。」
未だ頭の回らないヨウヒは、そう答えて走り去っていく後ろ姿を見送った。
（俺はいったい……そうだ、確か空に巨大な魔法陣が現れて、それで……）
と、ここまで考えて意識が覚醒したヨウヒは、慌てて体を起こす。同時に全身を苦痛が襲い、まだ二人いた魔術師が「無理しないでください。」と引き止める。
ヨウヒはやんわりと二人を振り払い、一人でゆっくりと立ち上がった。多少ふらつきはしたが、ヨウヒは問題ないと判断した。
そこへ村長がやってきた。
「気がついたか。」
「気がついたか、じゃない！　何でまだこんなにも村人が残っている！？　敵が、王国が攻めてくるかもしれないんだぞ！？　何故皆を連れて逃げなかった！」
ホッとしたように言った村長に対し、ヨウヒは怒鳴りつけるように叫んだ。
そんなヨウヒを宥めるように、村長は答える。

「それは最初に言った。中には逃げた者もおるが、みな、ここに残ってここを守ると言って聞かんかったんじゃ。この村におる者は殆どが王国を捨てておる。そしてここはみなの家じゃ。家に土足で踏み込んでくる輩を、追い払おうとするのは当然の事じゃろう？」

側でヨウヒの治療をこっそり行っていた魔術師をはじめ、今までで忙しく動き回っていた周りの村人たち全員が、一斉に村長の言葉に頷いた。

「この戦いはもう、わしらの戦いでもあるのじゃ。」

「……。」

ヨウヒは黙って、暫く村長の瞳を見つめていた。あるのは諦めや恐れではなく、決意。自分たちの住む場所を、大切なものを守り抜く覚悟だった。

「はぁ……、わかったよ！」

共に闘うと決まったヨウヒと村人たちは、全員で森へと向かった。大半が薙ぎ払われたとは言っても、まだ広大な森が残っている。村で闘って村がめちゃくちゃにされるのを避けるという理由もあったし、何より森の中で戦う方がこちらに有利だからだ。

ヨウヒは少し刃が欠けてしまった、透き通る青色の愛剣を見つめる。体も剣もボロボロの状態で、王国軍相手に闘おうとしている自分に思わず笑い出してしまいそうになる。

だが、引くわけにはいかないのだ。

「来たぞ！　王国軍だ！」

十分な準備などできるはずもなく、程無くして戦闘が開始された。

「くそっ！　やっぱり数が違いすぎる……。」

闘える者が二百人に満たないヨウヒ達に対し、相手の王国軍は桁違いの人数で突っ込んできた。とはいえ、ここは森の中だ。数人での行動ならいいが、それ以上の団体ともなると統率が乱れる。そこを衝いては離脱するのを繰り返すと、相手の進軍速度も中々上がらない。

徐々に下がりながらも、ヨウヒ達は大した被害も出さず確実に敵をらしていった。しかし、数が違った。殺しても殺しても、あとかわ湧き出すように敵が攻めてくる。村人達の中には疲れの見え始めた者もいる。

「チッ！　仕方ねぇ……。全員、俺の家まで後退しろ！」

村人達を先に行かせ、罠を仕掛けながらヨウヒも後退する。最後に迷い込みの魔法陣を描き、家へと急ぐのだった。

「そう、仕方ないわ。新しく作りましょう。」

転移魔法陣を破壊されてしまったことに責任を感じているハルの頭を、ヒィナは優しく撫でて言った。

「でも……。」

転移魔法陣は、作るのに数日を要する難しいものだ。今から作ったのでは、敵の到着に間に合わない。

しかし、ヒィナは笑って言った。

「私達人間は基本的に魔術を使うわ。魔法は人間にとって難しいから……。でもね、魔法を主に使うヒトもいるのよ？」

そう言って素早く魔法陣を書く上げると、ヒィナは短く呪文を唱えた。

「我、古の契約より命ずる。ｅｗ”９　０ｔ”ｓｍ！」

現れたのは、あのギーカルスだった。

「ょほ！　また会いましたな、皆様。」

そう言って、恭しく礼をするギーカルスに、ヒィナも優雅に礼を返す。それを見たフユキも、慌てて礼をする。

「母さんにも、魔人の知り合いいたのか……。」

まだギーカルスと面識がなかったハルだけが、少し驚いていた。簡単な紹介をして、事の経緯を聞いたギーカルスは快く転移魔法陣の作成を引き受けてくれた。

「ただし、我ら闇の民でも転移魔法陣は少々敷居が高い。三時間……いや、二時間半で描き上げてみせましょう。」

「十分です、卿。」

ヒィナは感謝の印として、ギーカルスの白骨化した頬にキスを一つ。自然にそれ受け取ったギーカルスは、さっそく転移魔法陣の作成に入った。

ギーカルスは黙々と転移魔法陣を描いており、フユキはそれを手

伝いながらついでに覚えようとしているようだ。ハルとヒィナは魔力を補充するために、魔石を投げ込んだ泉の水を飲んで、それをフユキにも飲ませた。
　三十分もした頃だろうか……。急に森の方が騒がしくなり、ギーカルス以外の面々に緊張が走った。しかし、それは杞憂に終わる。森から出てきたのは、村の人間たちだった。全員疲れきっていて、怪我をした人までいた。当初ギーカルスに驚いていた村人たちに簡単に説明をして、三人は治癒魔術を施しながら魔術を使いすぎた人たちに泉の水を飲ませて回った。
　そして、さらに少ししてヨウヒが無事戻ってきた。

「あなた！　無事でよかった！」
「おぅ！？　ただいまだ！」

　一番に飛び出してヨウヒに抱きついたのは、ヒィナだ。やはり不安だったのだろう、目には僅かに涙が浮かんでいる。ヨウヒはヒィナの目元を軽く拭い、もう一度しっかりと抱きしめた。ヒィナが落ち着いた後、ヨウヒはハルとも軽く抱擁を交わし、少し遠慮がちだったフユキも抱きしめた。
　互いの無事を喜んだ後、村人達も含めた全員でこれからの事を話し合う。

「なるほど、あの転移魔法陣で地下迷宮に逃げるわけか。」
「しかし、わしらは闘うと……。」
「生きていれば、いつか必ず戻ってこられるさ。」
「むぅ……。」
「その通りだわ。死んでしまったらも何の意味も無くなってしまうもの。」

　王国と闘うと決心していた村人たちは、少し逃げることに難色を

示した。しかし、ヨウヒとヒィナの必死の説得で、なんとかその方向で決定した。

「あと、一時間半か……。そろそろ、敵も何人か森を抜けてくるだろう。」

転移魔法陣が完成するまで、非戦闘員の村人とギーカルス及び転移魔法陣を守り抜かなければならない。いくらか生き残れる可能性は上がったものの、森を抜けてくる敵の数によってはこちらにも犠牲が出るかもしれない。

そんなことも覚悟しながら、ヨウヒは森を見つめる。

「きやがった……。」

「えぇ、それにこれは……。」

「村人達は手出し無用だ！　魔法陣とギーカルスの側に移動して、守りを固めるんだ！」

ヨウヒの指示に素直に従った村人たちは、少し離れた所で魔法陣を描き続けるギーカルスの側へと移動した。

それに反して、ヨウヒとヒィナに近付く二つの影があった。

「まさか、僕にまで下がれとは言わないよね？」

「私も家族の一員です！　一緒に闘わせてください！」

ハルとフユキだった。

ヨウヒは「無理すんなよ？」と言って困ったように笑い、ヒィナは黙って微笑みながら頷いた。

そして四人が其々構えた瞬間、四つの影が森から飛び出してきたのだった。

第九話　迫り来る脅威（後書き）

書いた物語をミスって消す！そんな能力いらないです；
どうもヒナです。
実は、この一連の戦闘を一気に上げようと思ったのですが……。
ごめんなさい。力不足で書けませんでした><。
いつまでも更新しないのは、待っててくださる皆さんに申し訳なくって、結局途中で上げちゃった☆
……ｏｒｚ
え？待ってる人なんていない？やめて！書く意欲が無くなっちゃうっ！！
次話は……早めに上げたいなぁ。

あ、あと
「てめぇ！うｐおせぇんだよ！」
「誤字ってんぞボケェ！」
「漢字読めねぇぞ！ルビ振れやゴラァ！」
「意味不明なとこあんぞ！缶詰やろう！」
等の簡単な感想、評価、メッセージ及びアドバイスをお待ちしております。
一言でもかまいません。気軽に送ってくださいね^^
ただし、上のような文だとヒナは凹んでしまって中々復活しませんので、オブラートに優しく包んで、できれば下投げでゆっくり送ってください。
「楽しみにしてます。」「頑張って！」
等のコメントをいただければ、早く続きが上げられるかと……。
剛速球は顔面で受け取ることになるのでご注意ください。
気絶して上げるのが遅くなります。

ではでは、また近いうちに会える事を願って。

第十話　激突

森から勢いよく飛び出して来た四人組は、ヨウヒ達の姿を確認して足を止めた。先頭にいた男と、後ろにいた女が一人ずつ顔を驚きの色に染めたのが分かった。

四人組は驚いた顔をした男の剣士とその後ろにいる女の魔術師、剣士の横に立つ女の剣士と少年の魔術師で構成されているようだ。そして、男の剣士が一歩前に出ると口を開く。

「まさか、神を追って貴方に辿り着くとは、僕は運がいいようですね。ヨウヒ隊長？」

「カイ……。お前まだ俺を狙ってたのか。」

カイと呼ばれた男は、当然というような顔をして、さらに一歩前に出る。女の剣士が後に続こうとして、カイに目線だけで止められた。それに伴いヨウヒも一歩前へ。

「僕は、貴方を超える為に宮廷聖騎士に入ったんですよ？　貴方を倒すまで、僕は何度でも貴方に挑みます。」

「どうせ、勝てねぇんだから諦めろよ……。って、この台詞も懐かしいな。」

どこか懐かしそうな顔をしていたヨウヒだが、そこで表情が一変して真剣なものになる。

「ここは訓練場じゃねぇ。俺たちは今、戦場にいる。それを分かった上で……剣を俺に向けるのか？」

「はい。今、貴方は王国で裏切り者として追われている。もうチャンスはないと思っていましたから……。これが最後のチャンスなら、

僕はそれを逃すつもりはありません。」
「そうか。分かった。」
そう言って、今度はヨウヒが味方の皆と横に距離を取った。それに合わせてカイも仲間と少し距離を置き、剣を抜いた。
「他の三人は任せたぞ？」
離れた所で剣を構えるヨウヒに、ヒィナ達三人は頷いた。
「元宮廷聖騎士、ヨウヒ！　参る！」
「宮廷聖騎士、カイ！　行きます！」
互いに騎士の礼をして、横に駆け出してから一気に距離を詰める為に前へ。同時にカイの後ろに控えていた女の剣士が、カイに追従する形で駆け出す。しかし、それは同じく飛び出していたハルに阻まれた。
「ちょっとお姉さん。騎士の一騎打ちに水差すような真似、しないで貰えます？」
「チッ！」
女はカイを追うのを諦めて、ハルに向き直る。
しかし気になるのか、女は一度だけ横目でカイの方を窺(うかが)うと、ヨウヒとカイは互いの剣を交えて激しく打ち合っていた。
「邪魔しないで。」
「邪魔？　僕より貴女の方が邪魔だと思いますけど？」
睨みを利かせて下がらせようと試みた女だったが、軽くハルに流

された。寧ろ馬鹿にしたような言い方に、女の視線が一層きつくなった。

「子供が遊んでていいとこじゃない！」

「子供？　舐めてると怪我しますよ？　お姉さん。」

そんな女の言葉をさらに馬鹿にしたような口調でハルは答えた。日頃から戦闘では冷静でいた方が有利だとヨウヒに叩きこまれているハルは、さらに普段では口にしないような言葉を使って女を挑発する。丁寧なようでいて馬鹿にした発言をするハルに、女はついに剣を抜いた。

「貴様！　子供だからと言って容赦はしないぞ！」

「僕も、女だからって手は抜きませんよ？」

対するハルは刀を抜かず、構えだけを取る。腰を落とし、右手を刀の柄に添える所謂抜刀術の構えだ。

「キルギス騎士団所属、ミム！　いくぞ！」

「僕は、騎士ではないんですけど、ハルです。よろしく。」

かなり激昂していたようだが、流石は騎士だ。ミムと名乗った女は、きちんと騎士の礼をするとハルへと駆け出した。ミムが近付くにつれ腰を深く落としていくハルは、ミムが刀の間合いに入ったと同時に小さく、しかし力強く呟いた。

「澱神流居合、爆・一閃！」

ミムはその底冷えするようなハルの声に危険を感じ、慌てて真横へと飛んだ。

瞬間、ボッ！　っという小さな爆発音と共にハルの刀が鞘から抜き放たれ、その刃は先に横へと逃げ始めていたはずのミムの左肩を浅く捕らえる。

「馬鹿なっ！？」

驚きと苦痛に顔を歪めたミムは、バランスを崩しながらも何とか持ちこたえた。

「貴様！　今何をした！？」

大人でも出せないような速さで、子供が剣を振った事にミムは思わず声を上げた。いつの間にか鞘に刀を戻していたハルは、そんなミムにご丁寧にも答えを返す。

「居合ですよ。刀を使わない王国では珍しい、かな？　ま、ちょっと鞘の中で爆発を起こして剣速をあげましたけどね。」

「……刀？　というか貴様……魔術も使えるのか。」

いくらか冷静になったミムは、落ち着いた口調で言うと改めて剣を構えなおす。そんなミムを見てハルは刀を抜き放った。油断していたはずの初撃を回避したミムに二度目は通じないだろうと思ったからだ。

「すまない。余計な口をきいた。それと、子供と侮(あなど)っていたのを詫びよう。」

「別に、いいですけどね。」

「では、改めて……参る！」

そして、今度は二人同時に飛び出し、互いの剣と刀を交える戦い

が始まった。

★

前衛組が戦いを始めた一方で、後衛組は未だに睨み合っていた。というより、一方的に相手の魔術師の女が、ヒィナのことをを睨んでいた。その視線を受けて、ヒィナは困ったように微笑んで口を開く。

「久しぶり、ネイねぇさん……。」

「なんで、アンタがここにいるのよ……。やっと、貴女を忘れることができたっていうのに！」

ネイと呼ばれた魔術師は、睨みつけていた瞳から涙を零す。それを見て、ヒィナは苦痛に顔を歪める。

「……ごめんなさい。」

「謝って欲しくなんかない！　なんで、私の前に……現れたのよ！」

状況が理解できないフユキを余所に、二人は言葉を交わしていく。とても、割り込んでいける雰囲気ではなかった。

しかし、ネイの後ろに控えていた魔術師の少年が、そんな空気を気にせず一歩前にでて口を開いた。

「ネイ？　彼女がそうなのですか？　ならば、無駄口を叩かずに早急に処理しなさい。」

感情の無い、機械のような声にネイはビクッ！　っと肩を震わせて少年を見た。そこには相変わらず無表情の少年しかいなかった。

「イル……ち、違うの！」
「何が違うのですか？　情報と合致する外見的特徴からも、彼女がそうなのでしょう？」
「ち、ちがっ！」

尚も反論しようとするネイを、イルと呼ばれた少年は鋭い視線で睨みつける。

「ネイ……。分かってください。僕だって最初のころとは違います。ですが、君が彼女を庇うと、家族が危ないんですよ？　分かっていますか？」

厳しいながらにも、どこかに優しさを含んだ言い方だった。
と、そんな二人のやり取りを見て、フユキは王国のある機関を思い出した。

「裏切り者の粛清機関……罪の鎖（チェイン・オブ・クライム）。」

思わず呟いたフユキの言葉に、イルが反応して視線を向けた。

「おや。失念していましたが、元々僕達は神を追っていたんでしたっけね。」

あまり興味なさそうに呟くイルに、フユキは鋭い視線を向ける。
彼がもしもチェイン・オブ・クライムの一員なら、フユキにだってこの状況がどういうものか把握できる。
きっと、王国を追われているヒィナの姉であるネイは、家族を人質に取られ、ヒィナを殺さなければ許されない立場にあるのだろう。
フユキはグッと拳に力を入れると、イルに向けて言う。

「あなたの相手は私がするわ。ホント、王国は腐った事が好きね。」
「……なんですって？　今、王国を侮辱しましたね？」
「もう一度言おうか？」
「いえ、必要ありません。」

お互いを睨みあったまま、空気だけが張り詰めていく。そして、その空気が一気に破裂すると同時に、二人は叫ぶ。

「神の力！　思い知りなさい！」
「光しか使えない神に、負けるとは思いません！」

フユキの大きく振りかぶった腕からは光弾が放たれ、イルの杖からは炎弾が放たれた。
二つは二人の中心でぶつかり合い、激しく爆発する。
こうして、光と炎の撃ち合いが始まった。

★

「ネイねぇさん。」

フユキとイルが戦いだしてから暫く、沈黙に耐えかねたようにヒィナが口を開いた。
ネイはヒィナの言葉にビクッと肩を震わせ、俯いていた顔を上げる。
久しぶりに見た姉の顔は、昔とあまり変わっていない。しかしよく見ると、少し痩せてしまったように思う。

「な、何よ？」

ヒィナは考える。

王国に追われるようにして逃げてから、姉とは今までに一度だって合わなかった。いや、合わないようにしていた。理由は簡単、チェイン・オブ・クライムの存在だ。
その組織は王国を裏切った者を家族の手によって粛清させることで、家族に王国へ逆らわないよう縛り付けるのだ。もちろん裏切り者と接触していようものなら、問答無用で人質を殺す。
戦えない両親を人質に取られ、イルという監視員までつけられて、妹に出会ってしまえば殺さなければならない重圧に、ネイはいままでずっと耐えてきたのだ。
そんな姉を、どうやったら解放できるのだろう？

「仕方ないわよね……？」

悲しげに顔を俯けるヒィナに、ネイは驚きの顔を向ける。

「待ってよ！　どうしてそんな……。簡単に！　私にはできないよ！」

泣き叫ぶ姉に、ヒィナは冷たい視線を向ける。ネイは涙をこぼしながら、ただただイヤイヤと首を横に振ってた。

「もう、逃げるのに疲れちゃったわ。だから、大人しく……私の為に殺されてね？　ネイねぇさん！」
「っ！？」

本気で殺すつもりで放ったヒィナの炎弾は、ネイの障壁に弾かれて上空で爆発した。

「う、うそ……？」
「うそじゃないわ！　行くわよ！」

「う、うわぁあああああああああ！！！！」

両親と妹を天秤にかける……。

ヒィナが王国を裏切ったと聞いた時、初めは恐怖でいっぱいだった。妹に出会えば、両親か妹か、もしくは自分が死ぬことになる。しかし暫く経って、ネイは思った。きっとヒィナはずっと遠くに行ってしまって、自分の前には二度と現れないんじゃないか？　するとかなり楽になった。会えないのは淋しかったけど、どこかで元気で生きていると信じていたから……。

しかし、そんな希望は消えてしまった。

可愛かった妹は、自分の前に現れてしまった。しかもあろうことか、自分に向かって本気で向かってきている。

ずっと出なかった答えに、未だ答えは出ていない。けど、けど……！

「ヒィナぁあああああああ！！」

ネイは、考えるのをやめた。

ただ、向かってくる敵を排除しよう。目の前にいるのは敵だ。妹ではない。敵なのだ！　それだけを考えて、ネイは全力で応戦するのだった。

第十話　激突（後書き）

まずは、更新が遅れたことをお詫びします；
でもね、理由があるんです。
無線ＬＡＮ使ってるんですけど、よく甥がコンセント抜くんですよ。
書きあげて、上書き保存押すと……
現在インターネットは利用できません。
の文字が！！恐怖ですよ。めっちゃ怖いです＞＜。
しかも、それが3回も起こるとか……。
直接ここで書いてるので、全部消えるんですよね；
書きなおすたびに、内容が変わるし……
ごめんなさい！ごめんなさい！そんな目で見ないで！見捨てないで！！
あぅ……
ということで、皆さんからの感想、アドバイス等をお待ちしています。
気軽に気付いたことや、応援メッセージ送ってくださいね＾＾
では、また近いうちに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0998m/

だったら二人で・・・

2011年10月7日10時45分発行